



# あかね

Vol. 7

平成 30 年 10 月発行  
独立行政法人国立病院機構  
東近江総合医療センター  
広報委員会

## インフルエンザについて

小児科医長 奥野計寿人

**去年も今年もインフルエンザになったんですけど…**

同じA型でもウイルスは変異しやすく、毎年のように少しずつ変化するために、今までインフルエンザになっても防げない場合があります。この変異の幅が大きいほど免疫の効果は低くなり、感染して発症した場合の症状も強くなるとされています。似たようなインフルエンザウイルスにかかったことがあるなら、意外に軽く済んだとか、今年はならなかったとかはあり得ます。

**インフルエンザワクチン打った方がいいですか？**

現在のインフルエンザワクチンは来るべきシーズンの流行を予測したA型の2種類、B型の2種類が入った4価ワクチンです。6歳未満の発症予防効果は60%です。これは例を挙げると、ワクチンをした100人のうち12人がインフルエンザになった、ワクチンをしていない100人で30人がインフルエンザになった

→100人全員にワクチンをすると、18人インフルエンザにならなくなる

→ワクチンをしてならなかった18人 ÷ ワクチンをしないでなった30人で、発病予防効果が60%です。

この例のように、インフルエンザワクチンは接種すれば絶対にかからないというものではありません。しかし発病予防や、発病後の重症化予防に関しては、一定の効果はありますので、ぜひ接種して下さい。免疫は接種後2週～5か月持続するので、11月末までに接種を終わらせておくのが好ましいです。

**インフルエンザの検査をお願いします**

インフルエンザ迅速検査は発症早期ではウイルス量が少なく、本当はインフルエンザでも陰性(=偽陰性)という結果になることがあります。発症から12時間程度経過してからの検査が望ましいです。周囲の状況からインフルエンザが強く疑われる場合は、インフルエンザの検査は不要で、早期の治療を含めた対応が現実的です(そもそも迅速検査が2000年に本邦で発売される前は、インフルエンザは臨床的に診断を行うものでした)。

**インフルエンザの特効薬ください**

一般的には細胞内で増殖したウイルスを細胞外に出さないようにする薬が用いられています。内服する薬、吸入する薬、点滴の薬があります。年齢や状態に応じて、医師が必要と考えたら処方します。今年からインフルエンザウイルスそのものの増殖を抑制する、これまでになかった効き方の薬が発売されました。どちらもウイルスが増えるまでの48時間以内の内服が必要です。

ここまで述べましたが、抗インフルエンザ薬は特効薬ではありません。解熱を1-2日早める効果くらいしかなく、重症化の予防はないです。インフルエンザへの対処法としては、ワクチン接種が最も有効です。